

菊川町埋蔵文化財報告書第37集

さるたや
猿田谷遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1996

静岡県菊川町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成7年8月1日から9月25日にかけて実施した静岡県菊川町東横地29-19-2ほかに所在する猿田谷遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
2. 調査を行なうに至った原因は、周知の遺跡において畠地かんがい用ファームポンドの建設工事が計画されたためである。調査に要した費用は、牧之原農業用水建設事務所が負担した。この委託契約は、「7畠総牧之原西部地区調査委託その1」である。
3. 発掘調査は、牧之原農業用水建設事務所長 近藤武典を委託者とし、これを請け菊川町教育委員会が実施した。

調査主体　　菊川町教育委員会

調査員　　後藤 和風（菊川町教育委員会）

作業員　　小林 好子 栗田 敏子 杉田 孝江 杉山 花江
福井 京子 丸尾 安代 水島まさ江 横山みさを
井指 秋雄 高岡 三郎 服部喜三郎 山川加知夫
赤堀 晓美（花園大学学生）

整理作業　　小塚佐知子 堀内 初代 三ツ井しの 水谷由美子

4. 本書の執筆と編集は後藤和風が行なった。
5. 遺物整理および実測図・挿図作成には松井由美子、塚本和弘の協力を得た。
6. 遺構・遺物写真は、後藤が撮影した。
7. 現地調査と本書発刊に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行なった。

教　育　長　　鈴木 静夫

事務局長兼課長　　横山 守孝

文化振興係係長　　石川 睦美

担当者　　後藤 和風

事務員（臨時）　西野 洋子

8. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。
9. 遺物の石材鑑定は、古田哲章氏（常葉学園菊川高校）に依頼し、御教示を賜った。
10. グリッド配置図で記した座標値は平面直角座標系Ⅷによる。遺構実測図における方位はこの座標北を表わす。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法および経過	2
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 層位	6
第2節 遺構	6
第3節 遺物	13
第Ⅳ章 まとめ	23

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 2,500)	1
第2図 グリッド配置図	2
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 10,000)	4
第4図 土層と採取試料番号	5
第5図 全体図	7
第6図 SK-1~5、SX-1 実測図	9
第7図 SB-1~3 実測図	11
第8図 出土遺物 1 (縄文土器)	15
第9図 出土遺物 2 (縄文土器)	16
第10図 出土遺物 3 (石器)	19
第11図 出土遺物 4 (石器)	20
第12図 出土遺物 5 (石器)	21
第13図 出土遺物 6 (山茶碗・かわらけ・陶器・錢貨)	22

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	SK-4赤化疊構成一覧表	5
第3表	縄文土器一覧表	17
第4表	石器一覧表	18
第5表	錢貨一覧表	23

図版目次

図版1	C・D・E区完掘状態	SB-1 完掘状態
図版2	SK-4集石検出状態	SK-4 完掘状態
図版3	SB-2 完掘状態	SB-3 完掘状態
図版4	出土遺物(石器)	
図版5	出土遺物(縄文土器)	
図版6	出土遺物(縄文土器)	
図版7	出土遺物(縄文土器・山茶碗・陶器・錢貨)	
図版8	出土遺物(錢貨・かわらけ)	SK-1 遺物出土状態

報告書抄録

ふりがな 書名	さるたやいせきにはくつちょうさほうこくしょ 猿田谷遺跡Ⅱ発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	菊川町埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号	第37集						
編著者名	後藤和風						
編集機関	菊川町教育委員会						
所在地	〒439 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 TEL. 0537-35-0925						
発行年月日	西暦 1996年 3月 9日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
さるたやいせき 猿田谷遺跡	新がまぐらかわちょう 小笠郡菊川町 ひしよど 東横地	22446	34度 182 43分 14秒	138度 6分 ~ 28秒	19950727 19950925	851	煙地かんが い用ファ ームボンド建 設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
猿田谷遺跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡 3棟	縄文土器 石			
			土坑 4ヶ所	縄文土器			
	墓	中世	土壙 1ヶ所	かわらけ 銭貨			

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

猿田谷遺跡は、昭和57年の「菊川町遺跡地図」においてすでに登録されていた周知の遺跡である。昭和61年には農道の拡幅工事に伴い発掘調査が行なわれている。その結果はつぎのとおりである。

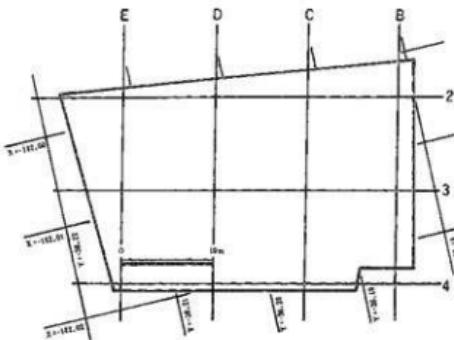
第1次調査 昭和61年7月22日～8月26日 農道拡幅 2,000m² 繩文時代集落跡
旧農道に添って拡幅工事の及ぶ茶畑に調査区を13ヶ所設定し行った。幅1.5m、長さは長いもので23m、短いものは7m足らずのトレンチ状の調査区が点在した。こうした経過を踏まえ、今回の調査は第2次調査に位置づけられる。

前回の調査も、静岡県牧之原農業用水建設事務所による畑地帯総合土地改良事業の実施によるものであった。通称畑総と呼ばれるこの事業は、畑地灌漑、排水、農道、農業用地造成などの事業を行ない、農業経営の近代化や合理化を推進し、地域農業の振興を目的としたものである。

今回もこの事業の一環で、当該地に畑地灌漑用ファームボンド（貯水槽）の建設工事が計画されたからである。これにより、開発計画内の猿田谷遺跡の一部が破壊されることが明らかになった。平成7年に静岡県牧之原農業用水建設事務所から遺跡の有無の照会があり、これを受けて、同所と菊川町教育委員会で協議し、工事着手前に発掘調査を実施して記録保存することで合意を得た。



第1図 位置図(縮尺1:2,500)



第2図 グリッド配置図

担うことになった。平成7年6月2日に事業者の静岡県牧之原農業用水建設事務所と菊川町教育委員会との間で、発掘調査の委託契約書が取り交わされた。

現地調査は、表土を機械で除去したのちに8月1日から人力による調査に入った。調査区には茶園改植による攪乱が広く見られた。この範囲を特定し、順次除去して始めて遺構検出が可能となった。このため、当初計画より数日間延長し9月25日におよそ2ヶ月の現地調査を終了した。整理作業は平成7年3月9日に完了した。

第2節 調査の経過及び方法

経過

事前作業

平成7年7月28・31日 バックフォーで調査区西半分の表土除去を行なう。可動式プレハブを搬入する。

調査の開始

平成7年8月1日～8日 器材を搬入し現地調査を開始する。調査区西部から人力による粗掘り作業を行なう。土壌(SK-1)・土坑(SK-2～5)を検出した。計測し遺物を取り上げ後に掘削する。

8月9日～8月11日 全面に広がる攪乱を人力で除去する。これとともに小穴・柱穴多数を順次検出し掘削する。

8月17日～8月27日 攪乱除去に難渋する。引き続き小穴・柱穴多数を検出し掘削する。

8月28・29日 バックフォーで調査区中央部の攪乱を除去するとともに下層確認トレンチも掘削する。

8月30日～9月5日 国土座標に基準杭をプロットする。上層遺構の掘削をほぼ終

静岡県牧之原農業用水建設事務所は菊川町教育委員会に平成7年4月21日付けで発掘調査を依頼した。同年5月18日付けで文化庁長官あてに文化財保護法57条3項に係わる埋蔵文化財発掘調査の届け出を提出した。さらに発掘調査のための費用・期間・体制について協議し、菊川町教育委員会が調査主体となり、調査費用は開発側の同所で全額負担することになった。

了する。

9月6日 完掘状態を撮影する。

9月8日～9月20日 調査区東部から下層遺跡確認トレンチを人力で掘削する。

9月21日～9月25日 穴穴住居跡（SB-1～3）を検出し掘削・計測と写真撮影を行なう。北壁から土壤試料を採取する。発掘器材の全てを撤収し、現地調査を完了する。

方 法（第2図）

発掘調査は、工事計画のほぼ全面にあたる851m²を発掘の対象地とした。調査方法は、バックフォーで表土や耕作土を除去した後に、人力で掘削し、精査・写真撮影・測量の順に行なう。

測量用の基準杭を設け、発掘区内を10m方眼のグリッドに区切る。このグリッドを基準に発掘調査を進める。杭の東西列を東からA・B・Cラインとアルファベットで、南北列を北から1・2・3ラインと数字で呼び、その交点にあたる北東コーナー杭をグリッド名にした。たとえばB 2区の具合である。グリッド基軸の方位はN-12° 45' 00'' - Eで、グリッド杭は国家座標にプロットした。

現地での作図は、20分の1の縮尺を原則とし、必要に応じ10分の1の縮尺で行なった。また、遺物包含層出土遺物は極力出土位置を計測し、後日室内でドットによる作図を行なった。

標高測量は、発掘区内にBM（64.611m）を設定し基準点とした。調査に伴う写真撮影には、6×7cm判カメラ（白黒フィルム）と2台の35mm判カメラ（白黒フィルムとカラーリバーサルフィルム）を使用した。撮影は遺構を清掃したのち、ローリングタワーや高所作業車で上空から撮影した。

第II章 地理的・歴史的環境

猿田谷遺跡は、東名高速道路菊川インターチェンジから南東へ3kmに位置する。大龍山興教寺の東南東0.2kmに所在する。南北0.7km、東西1.8kmの河岸段丘上にあり標高64mである（第1・3図）。段丘上最も高い場所に位置し、南北に平坦面が細長く伸びる。この段丘は東にある牧之原台地から北西方向に張り出したもので旧菊川の河川敷が隆起したものと考えられる。眼下には、北は奥横地川が西流する谷地形を呈する。段丘の裾をかすめるように北東から西にかけて牛渕川が南流し、段丘の北から西方向には沖積平野が広がる。南も、三沢川が西流し谷地形を呈する。南北のこうした谷地形は、この段丘が東から西に伸びる別の2つの丘陵に挟まれていることによる。



第3図 遺跡の位置と周辺遺跡（縮尺1:10,000）

番号	遺跡名	時代	位置	備考	番号	遺跡名	時代	位置	備考
1	横田谷遺跡	縄文～中世	三沢・段模地	昭和61・平成7年度調査	11	椎ヶ下道跡	弥生～平安	段模地	昭和48年度調査
2	二沢西原遺跡	旧石器～古墳	〃	昭和55・59年度調査	12	横地城遺跡	室町	興廢地	昭和62年度調査
3	興廢寺原遺跡	縄文～奈良	〃		13	敵ヶ谷遺跡	平安～室町	〃	昭和62・平成5・7年度調査
4	久保之谷遺跡	縄文～室町	段模地	平成5・6年度調査	14	藤丸跡遺跡	室町	〃	昭和62年度調査
5	東横地西原遺跡	縄文～弥生	〃	昭和61年度調査	15	杉の谷飛道跡	平安～室町	〃	
6	前山遺跡	縄文	〃		16	明体遺跡	平安～室町	〃	
7	山王裏遺跡	縄文	三沢		17	田中道跡	古墳～鎌倉	段模地	
8	段模地遺跡	縄文～古墳	段模地		18	横地城下遺跡	平安～江戸	興廢地	
9	御開敷段模地	縄文～平安	〃	昭和55年度調査	19	横地城西遺跡	平安～室町	〃	
10	段模地古墳	古墳	〃		20	延命段模地	鎌倉～室町	〃	

第1表 周辺遺跡一覧表

付近は段丘斜面に山林を残すほかは、尾根筋を中心に開墾され一面茶畠が広がる。今回の調査地点もこうした茶畠の一画にあたる。人家の大部分はこの段丘が沖積平野

に埋没する裾あたりに密集する。段横地や三沢の集落がそれである。

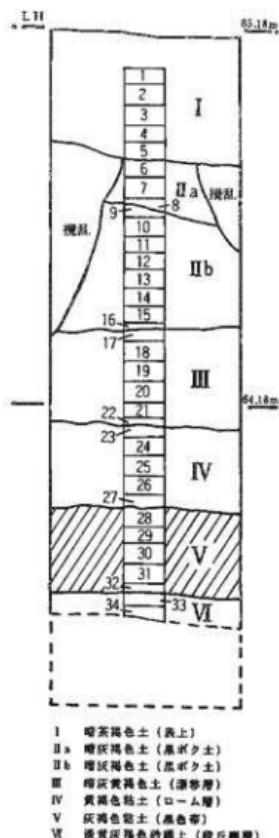
段丘上を中心付近の遺跡分布を概観するとつぎのようになる。ヒトの営みが行なわれた場所が概ね時代ごとに変遷している(第3図・第1表)。

旧石器時代から弥生時代にかけては、段丘上に集落が密集している。西から1猿出谷遺跡、3興嶽寺原遺跡、2三沢西原遺跡、8段屋敷遺跡、6前山遺跡、7山王裏遺跡、4久保之谷遺跡、5東横地西原遺跡、9御屋敷段遺跡などが連なる。三沢西原遺跡では、町内最古の2万年前まで遡る旧石器時代の遺跡に始まり、縄文時代早期の住居跡、弥生時代後期の集落跡などが確認された。

古墳時代では、10段横地古墳が見られる。

奈良時代から平安時代においては、沖積平野や低位の段丘上が主な遺跡分布地となる。15杉の谷橋遺跡、17田中遺跡がこれにあたる。付近はその地名から条里遺構の存在もうかがえる。

中世には、横地城を中心とした丘陵部と奥横地川流域の谷部に分布の中心がある。丘陵上では12横地城遺跡、13殿ヶ谷遺跡、14藤丸館遺跡、20延命段遺跡が、谷部では18横地城下遺跡、19横地城西遺跡が見られる。12の横地城はその代表的な遺跡で室町時代に築造された連郭式の山城である。文明8年に今川義忠により落城されるまで横地氏が君臨した居城である。また13の殿ヶ谷遺跡は横地氏の居館跡と考えられ、鎌倉時代の遺物と礎石建物跡などがそれを裏付ける資料として確認されている。横地城と合わせ中世の貴重な資料といえる。



第4図 土層と採取資料番号

石 材	ほぼ光影圖(複合によるほぼ光影圖も含む)							鏡片(複合後も長6~10cmの鏡片)							鏡片(長幅6cm未満の 鏡片)		光形鏡+ 鏡片+砂片 (結果層)	
	砂	岩	花崗岩	チャート	泥	岩	その他の	小計	砂	岩	花崗岩	泥	岩	その他の	小計			
点 数	53	45	22	10	2	131	18	12	12	0	42		46					
合計重量(g)	12320	17000	5300	2000	200	36600	2000	1500	1000	0	4500		450				41450	
平均重量(g)	237	378	241	200	100	279	111	125	83	0	107		10					

第2表 SK-4赤化壁構成一覧表

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 層位（第4図）

基本層位は人別6層細別7層に識別できた。I層は表上で現代の耕作土である。後述するII層と同じ黒ボク質の土である。層厚は27~47cmである。径0.6~3cmの黄色粘質土ブロックを含み、茶園改植の痕跡と思われる。

II層は黒ボク土でその締まり具合・硬さにより2分できる。IIa層はIIb層よりも軟弱で、全体に茶樹の根が及んでいる。一方IIb層は、IIa層に比べいくぶん硬く締まっていて、茶樹の根はあまり及んでいない。層厚はIIa層は14~36cm、IIb層は5~38cm、II層全体で35~52cmである。

III層はII層とIV層の漸移層である。茶樹の根はほとんど及んでいない。層厚は19~45cmである。

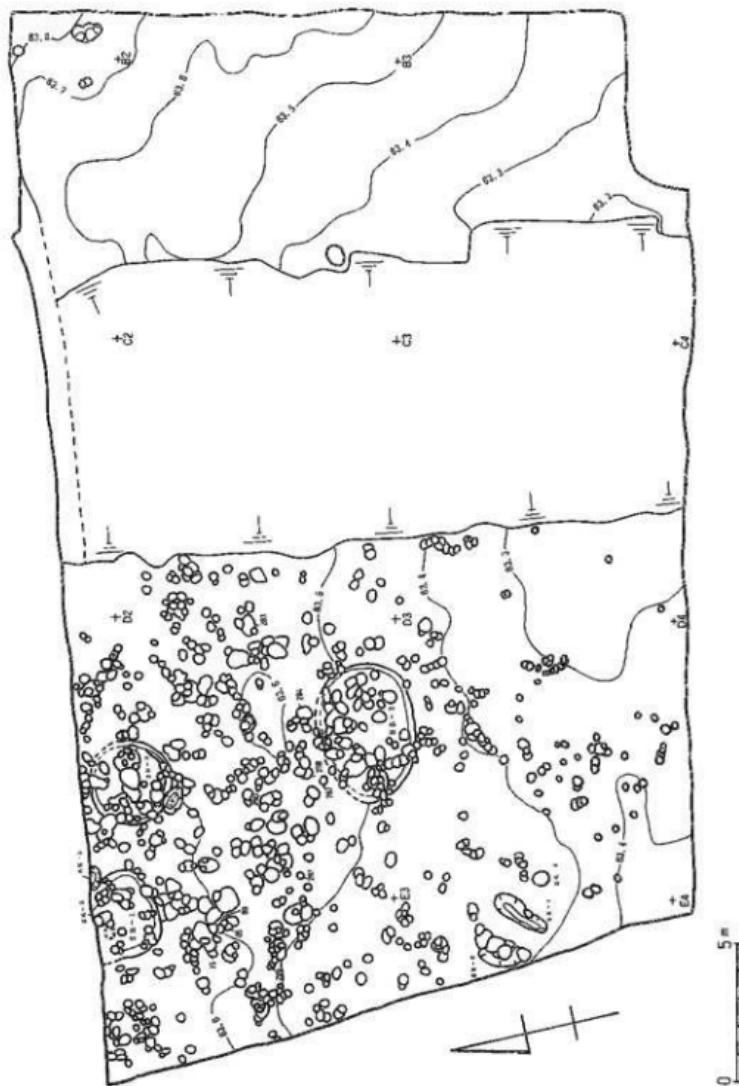
IV層とV層は風成堆積のローム層である。IV層は礫をほとんど含まず、径1~3.5cmの礫を微量含む。層厚は10~35cmである。本層上面が今回の遺構確認面で、全般に遺構はV層を掘り込む落ち込みとして確認された。V層には数ヶ所で炭化物粒が集中する地点が認められたが、石器等の遺物やその他人為的な痕跡は確認されなかった。このため本層が遺構基盤層（地山）であると判断された。上面は北から南になだらかに下降する。東西は平らである。

V層はブラックバンドと称されるやや黒味を帯びた土層である。径0.05~0.2cmの白色粒子を少量含むのが特徴である。径1~4cmの礫を少量含み火山岩も見られる。同じ段丘上にある三沢西原遺跡では、土壤分析の結果本層にAT火山灰のピークが確認されており、2万年前ごろに堆積したことが明らかになっている。しかし上述のとおり、今回の調査では旧石器時代の遺跡は検出されなかった。

VI層は段丘疊層である。径6~18cmの円錐間に糠色をした砂質土が詰まった土層である。V層同様に径0.05~0.2cmの白色粒子を少量含む。構成礫は砂岩と花崗岩が最も多く、ついでチャートや泥岩の順である。層厚は本層上面から12cm下まで掘削し確認するに留めた。

第2節 遺構（第5図）

検出された遺構は、土坑（SK）5ヶ所、竪穴住居跡（SB）3棟、柱穴・小穴（ピット）301ヶ所、性格不明遺構（SX）1ヶ所である。茶園改植による激しい攪乱を受け、遺存状況はよくない。したがって遺物も少なく、遺構の年代や性格を判断する材料を欠くものも少なくない。時代は遺構に伴出した少数の遺物と遺構埋土の特徴、そして周辺にある遺構との関連から推し量った。時代は縄文時代早期と鎌倉時代の2ヶ所の遺構のはかは、ほとんどが縄文時代中期のものと思われる。



第5図 全体図

調査区の地形は、北から南になだらかに下降し東西はほぼ平らである。調査区中央部やや東寄りには緩やかに南に下降する浅谷がある。遺構のほとんどは調査区西半分で確認された。

以下時代ごとに分け、遺構別に記述する。

縄文時代の遺構

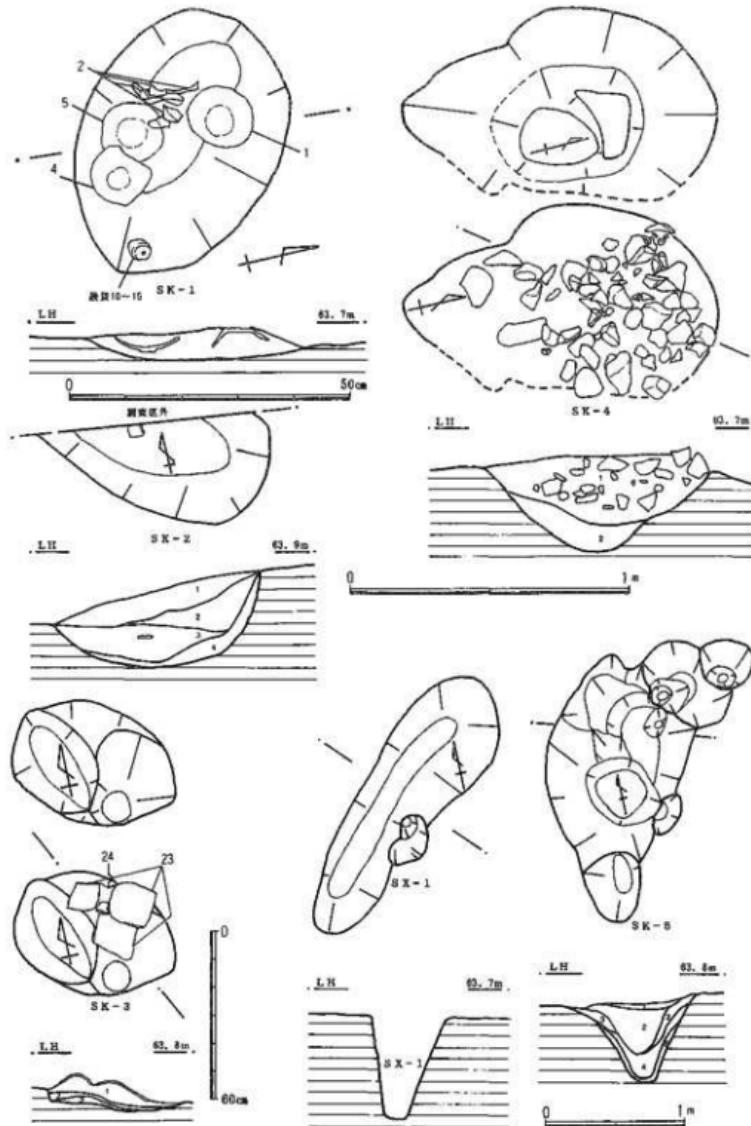
SK-4（第6図・写真図版2） D3区中央部西に位置する。今回の調査で最も古い時期の遺構と思われる。平面形が不整橢円形の落ち込みに拳大の赤化礫を多量に含む土坑である。東側は攪乱を受け断ち切られているが、残存する部分から推測すると平面形は不整橢円形と思われる。規模は長径114cm、短径70cm、検出面からの深さ33cmである。掘り方は法面の途中に中段をもつ。底の形態も不整橢円形を呈し、規模は長径28cm、短径19cmである。埋土は2層で、第1層の黄褐色土は径5~20cm大の赤化礫を多量に含む。第2層は暗黄褐色粘質土で第1層より粘質度が高い。礫は含まないが、径0.1~0.2cmの炭化物と径0.1cmの焼土を微量含む。しかし壁面には熱による赤化や炭化物の付着は見られなかった。

遺物を伴わず遺構の年代は定かでない。しかしこの2点から縄文時代早期の遺構と推測される。三沢西原遺跡で同様の集石土坑が早期の土器を伴って確認されていること。D2・3区、E2区など付近の遺物包含層で該期の縄文土器が出土していることによる（第3表・第8図）。

赤化礫の総重量は約41kgであった（第2表）。構成礫の接合作業後の点数は、ほぼ完形礫が131点、破片が42点、碎片は46点である。ほぼ完形礫の大きさによる内訳は、大（20~11cm）と中（11~7cm）で9割以上を占め、小（7~4cm）は10点に満たない。赤化はほぼ全ての礫に見られる。また、黒いシミのあるものが20点あり、礫面や稜線に見られた。赤化と風化の進行により正確な石材判別は困難であったが、第2表の5類に大別された。構成点数の割合は砂岩、花崗岩で74%を占め、チャート、泥岩、その他の順で少なくなる。段丘礫層における構成割合とほぼ等しく、石材による意図的な選択は見受けられない。

石器からの転用をうかがわせる礫が1点見られる。磨石とおぼしき砂岩製の礫で赤化が認められる。重さ321g、長さ9cm、幅7.5cm、厚さ4cmである。革靴の頭の形をした円礫で、底面（7.4cm×7cm）とその先端部（1.5cm×7cm）に平滑な摩滅面2面を持つ。

SK-2（第6・7図） D1区東南隅に位置し、SB-1とSK-3の東に位置する。平面形は北東部が調査区外に伸びているため定かでないが、残存する部分から推測すると橢円形の土坑であろう。残存する規模は長径75cm、短径55cm、検出面からの深さ10cmである。掘り方はⅢ層から落ち込みが始まっていることが確認された。底



第6図 SK-1~5、SX-1実測図

の形態は上端同様に梢円形を呈し、規模は長径50cm、短径38cmである。埋土はつぎの4層である。第1層は暗灰褐色土、第2層も暗灰褐色土、第3層は暗灰黄褐色土、第4層も暗灰黄褐色土である。遺物は縄文時代中期の上器（第8・9図）が出土した。このことから判断して該期の造構と考えられる。

SK-3（第6・7図） D1区西南隅にあり、その一部はE1区に掛かって位置する。SB-1の中にあり、東にはSK-2がある。平面形が梢円形の土坑である。規模は長径60cm、短径41.5cm、検出面からの深さ6cmである。掘り方は浅い皿状を呈するが、3つのビットが切り合ったような形状である。底の形態は円形で規模は径10cmである。埋土はつぎの3層である。第1層の暗灰褐色土はボソボソした感触である。第2層は暗灰黄褐色土で、第3層は黄暗灰褐色土で粘質がある。遺物は縄文時代中期の土器（第8図-23・写真図版5上）が出土した。このことから判断して該期の造構と考えられる。伴った遺物はこれだけで造構の性格は定かでないが、竪穴住居跡SB-1に伴う埋甕造構と思われる。

SK-5（第6図） E3区北東にあり、SX-1の北西に位置する。平面形は北と南が小穴で断ち切られているため、残存する部分から判断すると元は不整梢円形の土坑であったと思われる。残存する規模は長径156cm、短径100cm、検出面からの深さは55cmである。掘り方は急峻な角度で落ち込んでいる。底の形態は隅丸方形を呈し、規模は長径50cm、短径46cmである。

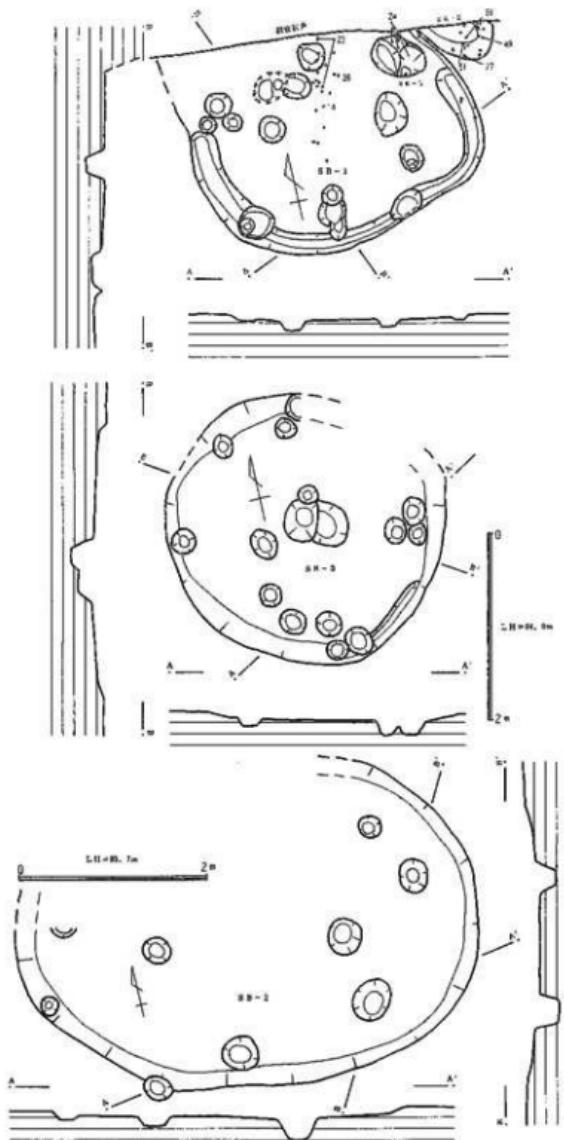
埋土はつぎの5層である。第1層の茶褐色土は径0.5～1cmの礫微量を含む。第2層の暗茶褐色土は径0.5cmの焼土や径4cm大の赤化礫の碎片、そして径0.1～0.2cmの炭化物を微量含む。第3層の茶褐色土は径0.5～1cmの赤化礫の碎片と径0.1～0.3cmの炭化物を微量含む。第4層の淡茶褐色土は径0.5cmの焼土や径4cm大の赤化礫の碎片、そして径0.1cmの炭化物を微量含む。第5層の淡茶黃褐色土は焼土を微量含む。

遺物は碎片の縄文土器数点が出土したに留まる。このことから縄文時代の造構と思われる。壁には熱による赤化や炭化物の付着は見られないが、微量ながらも埋土に赤化礫の碎片や焼土、炭化物などが認められることから火の使用がうかがえる。

SX-1（第6図） E3区中央部東、SK-4とSK-5の中間に位置する。平面形が細長い溝状の梢円形の窪みである。規模は長径212cm、短径64cm、検出面からの深さ70cmである。掘り方は急峻な角度で落ち込んでいる。底の形態も上端と同様で、規模は長径154cm、短径20cmである。埋土は1層で淡黄色シルトである。硬く締まった土で径0.2cmの漆喰状の白色粒子を均一に微量含む。また径4～12cmの自然礫を32点含んでいた。遺物を伴わざ造構の年代は定かでない。

竪穴住居跡

3棟とも北からなだらかに張り出した微高地上に立地していた。IV層上面の観察で



は竪穴住居跡の輪郭は明らかにならず、下層確認レンチの掘削で住居跡の一部を断ち切って、はじめて落ち込みの存在が確認された。埋土はⅢ層とほぼ同じ暗灰黄褐色土であった。

S B - 1 (第7図・写真図版1下) E 2区北東隅に位置している。北側が調査区外に伸びているため定かでないが、残存する部分から推測すると隅丸方形と思われる。規模は東西293cm、南北165cm、検出面から床面までの深さは6cmである。断面形は浅い皿状を呈する。床面は全域にわたりよく締まっているが、貼床は見られなかった。ピットは13ヶ所検出され、大きさは大小2つに分かれる。比較的浅く小さいもの(径18~21cm、深さ6.5~11.5cm)と大きく深くなるもの(径24~48cm、深さ8.5~12.5cm)とがある。配置も不規則で、それら全てがS B - 1に関連する柱穴とは思われない。壁溝は1条で住居跡南半分にコの字状に巡る。幅21~31cm、深さ1~3cmである。地床炉と思われる窪みは住居跡中央やや西側に位置する。卵型の梢円形で東西42cm、南北30cm、深さ19cmである。埋土は暗灰褐色土で、径0.1~0.3cmの焼土や径0.1~0.3cmの炭化物を微量含む。住居跡埋土は暗灰黄褐色土である。遺物は縄文時代中期後葉の土器がSK - 3とその西側付近から出土した。

のことから該期の遺構と思われる。SK - 3はつぎの3点から竪穴住居跡S B - 1に伴う埋甕遺構と考えられる。S B - 1の中央東寄りにあり、壁溝のとぎれる場所に位置していること、また地床炉が住居跡中央からやや北西に寄って位置することなどからこの付近が入口とおぼしきこと。出土した縄文土器は口縁部から胴部上半で胴部下半や底部片を伴っていないことなどによる。

S B - 2 (第7図・写真図版3上) D 2区中央南に位置する。平面形は東西に長い梢円形で規模は東西493cm、南北約350cmである。検出面から壁直下の床面までの深さは4~10cmである。断面形は浅い皿状を呈し、床面は中央部に向かって深くなり、検出面から最大15.5cm下がる。床面は全域よく締まっているが、貼床は見られない。ピットは9ヶ所検出され、大きさは大中小3つに分かれる。比較的浅く小さいもの(径18~30cm、深さ10.5~11.5cm)や中位の大きさでいくぶん深いもの(径25~40cm、深さ13.5~16.5cm)、さらに大きく深いもの(径36~45cm、深さ18.5~22.5cm)とがある。配置は不規則であるが、壁を断ち切るピットはいずれも小さく浅い。また、深いものは主柱穴と思われる。壁溝や地床炉と思われる窪み、焼土の痕跡は見られなかった。住居跡埋土は暗灰黄褐色土である。遺物は出土しなかったので遺構の時代は定かでないが、付近の遺物包含層から縄文時代早期と中期の土器が出土していることからいずれか該期の遺構と考えられる。

S B - 3 (第7図・写真図版3下) D 2区北西に位置する。平面形はほぼ円形で四隅に若干の張り出しが認められる。規模は径約300cm、検出面から床面までの深さは7~10cmである。断面形は浅い皿状である。床面は中央部に向かってなだらかに深

くなり、検出面から最大12cm下がる。全域よく縮まっているが、貼床は見られない。ビットは15ヶ所検出され、大きさは中央の2ヶ所を除き、ほぼ同じ大きさ（径20～30cm）である。深さにより2つに分けられる。比較的浅いもの（深さ5～10.5cm）と深いもの（深さ13～16cm）がある。配置は不規則でそれら全てがSB-3に関連する柱穴とは思われない。埋土は暗灰褐色土である。壁溝は1条で住居跡南にわずかに検出されたに留まる。幅7～10cm、深さ1～1.5cmである。中央の窪みには焼土が含まれる痕跡と思われるが、壁面に赤化は見られなかった。遺物が出土せず年代は定かでないが、付近の遺物包含層から縄文時代中期の土器が多数出土していることから該期かそれより後の時代の遺構と思われる。

小穴・柱穴（第7図） 全部で311本検出された。調査区西半分を中心に分布し、特にその北側に密集する。建物跡として把握されたのはSB-1～3の3棟だけで密集するその他のビットに規則的な並びは見出せない。P-75・89・283・287・299には縄文時代早期の土器が伴出した。

中世の遺構

SK-1（第6図・写真図版8） D2区北東部に位置する。平面形が楕円形の土壙である。規模は長径50cm、短径35.5cm、検出面からの深さ10cmである。掘り方は浅い皿状を呈する。底の形態も楕円形で規模は長径30cm、短径13.5cmである。埋土は1層で暗灰褐色土である。遺物はかわらけ5個体と錢貨6枚が出土した（第13図-1～5、10～15）。かわらけの形態から判断して鎌倉時代ごろの土壙と思われる。

第3節 遺物

ポリコンテナに1箱分の遺物が出土した。縄文時代早期・中期と中世や近世のものである。種類は石器、土器、陶器、金属製品である。土器のほとんどが縄文土器で圧倒的に多い。ついでかわらけ、山茶碗などの中世の土器類と近世のものと思われる陶器数点からなる。縄文時代と中近世のものに分け記述する。

縄文土器（第8・9図、第3表、写真図版5～7）

ポリコンテナ半分ほどの量である。時期は早期と中期後葉で後者が8割を占める。器種は早期には尖底の深鉢が、中期後葉では深鉢と浅鉢がある。

分類は同時期のものを大枠の群として捉える。これを文様的特徴と胎土の質等に基づき型式ごとに細別し類とする。また型式が明らかでなくとも文様的特徴に基づき一つの類として扱う。種別は類別をさらに細分した括りで、遺存部位や器形、ある程度の文様的特徴を分類の基準とする。底部で時期の特定が困難なものは、上記の分類外とし一群にまとめて扱う。

遺物は、遺構に伴ったものも遺物包含層出土のものも合わせて記述する。今回の調査ではつぎの2群12類に分類された。

I群土器 1～13は早期の資料と思われる。II群土器に比べ、色調は明るいレンガ色を呈する。

a類 1は表裏繩文土器である。外面の縄文は条が太い。

b類 2～8は撚糸文土器である。2は口縁部、8は尖底深鉢の尖底部である。

c類 9～13は繩文土器である。12・13はR Lである。その他はL Rである。

II群土器 中期後葉の土器群である。文様構成を主に、さらにa～j類に分類する。

a類 全般に厚手の器壁である。色調は暗茶褐色である。隆帯で楕円形や長方形の区画を作り、その内側を縄文や条線で埋める。文様構成と胎土の色、そこに含まれる砂粒の多寡でさらに2種に細分する。

a類1種 14～19は胎土に白色粒子を多数含む。

a類2種 20・21は低い隆帯とそれに沿った沈線による区画に縄文や条線を充填している。胎土は全体に白っぽく乳黄赤褐色を呈する。白色粒子を含むが1種に比べると少ない。

b類 22は胴部文様帶に沈線による区画が施されている。区画の内側は縄文が充填されている。器形は内弯度が高い。

c類 23～36は口縁部につぎの特徴を有する。口縁部が膨らむて内弯するいわゆるキャリバー形の深鉢である。平口縁で器壁は全体に薄手である。交互刺突文に酷似した文様で沈線の直下に刺突列を施す。その下に半截竹管状施文具で波状の沈線2条が並行する連弧文が描かれる。口縁部のみに文様が集中し、頭部は無文である。文様構成の相違からさらに2種に細分する。

c類1種 23～35は上記の特徴が明らかである。23は口縁部の数ヶ所に縄文地文が見られる。

c類2種 36は口縁部外面に沈線で長方形と思われる区画をもつ。この内側にさらに沈線で円形か渦巻文を施す。

d類 口縁部に沈線による渦巻文と楕円形の区画を配する。口縁部は内弯し、頭部がくびれる深鉢である。文様の要素からさらに2種に細分する。

d類1種 37は内弯した口縁部に沈線による渦巻文と楕円形の区画をもつ。38は斜位の条線である。櫛齒状施文具で施文されている。

d類2種 39～42は、全般に分厚い器壁である。口縁部に沈線による楕円形の区画をもつ。

d類3種 43は口縁部と思われる。沈線による楕円形の区画の内側を斜位の縄文で埋める。

e類 44は胴部に縦方向の縄文帯を設け、これにS字を連ねたような結節縄文を施している。

f類 45～47で縄文施文のものを一括する。45はR L縄文、47はL R縄文である。

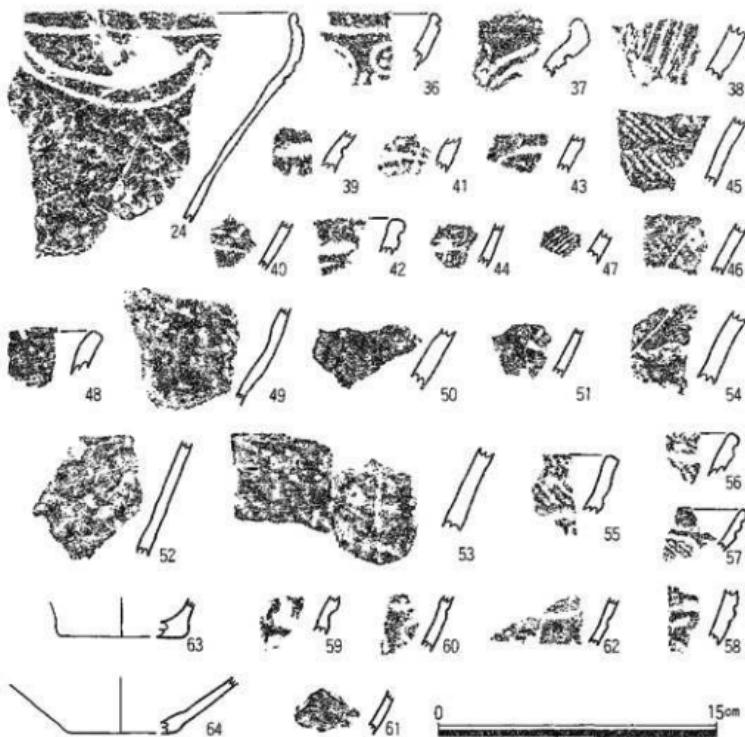


第8図 出土遺物1（縄文土器1）

器壁は暗茶褐色を呈する。

g類 48~54で無文の土器を一括する。48・50・53・54は器壁が分厚い。

h類 55~58で沈線による椭円形の区画を縦文で埋めているものを一括する。



第9図 出土遺物2（縄文土器2）

i類 59・60で沈線と隆帯からなる文様構成のものを一括する。

縄文土器のまとめ

本遺跡出土の縄文土器は、層位的な分類が不可能なため、文様の特徴から2群12類に分類した。以下、群や類毎の編年・系統について述べる。

I群土器：早期のもの

a類：表裏縄文土器

b類：撚糸文土器

c類：縄文施文の土器

II群土器：中期のもの

a類：曾利Ⅲ・Ⅳ式系統

番号	出土地点 遺構		時期	種類	部位	厚さcm	登録No.	番号	出土地点 遺構		時期	種類	部位	厚さcm	登録No.
	地区	地区							地区	地区					
1	D-3	早期	深鉢	胴部	0.65	165	33		D-2	中期後葉	深鉢	口縁部	0.45	158	
2	P-75	E-2	"	口縁部	0.7	182	34		C-2	"	"	口縁部	0.4	142	
3	E-2	"	"	胴部	0.65	177	35		D-2	"	"	胴部	0.7	156	
4	D-2	"	"	胴部	0.6	156	36		D-2	"	深鉢	口縁部	0.7	31	
5	D-2	"	"	胴部	0.6	209	37		D-2	"	"	口縁部	0.7	161	
6	P-283	D-2	"	胴部	0.7	212	38		D-2	"	深鉢	胴部	0.8	61	
7	P-287	D-2	"	胴部	0.7	216	39		D-2	"	"	胴部	0.7	158	
8	E-2	"	尖底深鉢	底部	0.9	233	40		D-2	"	"	胴部	0.55	41	
9	P-85	E-2	"	深鉢	胴部	0.6	183	41	SK-3	E-1	"	深鉢	胴部	0.75	57-3
10	P-299	E-2	"	胴部	0.6	231	42		D-2	"	深鉢	口縁部	0.7	156	
11		D-2	"	胴部	0.65	41	43				"	胴部	0.65	17	
12	P-89	E-2	"	胴部	0.7	184	44		E-2	"	"	胴部	0.5	152	
13		D-2	"	胴部	0.75	158	45	SK-2	D-1	"	"	胴部	0.6	64	
14		E-2	中期後葉	深鉢	口縁部	1.3	78	46	E-2	"	"	胴部	0.6	152	
15		D-2	"	胴部	0.7	10	47		D-2	"	"	胴部	0.65	41	
16		D-2	"	深鉢	口縁部	0.75	174	48		D-2	"	深鉢	口縁部	0.8	15
17		D-2	"	胴部	0.7	18	49	SK-2	D-1	中期後葉	"	胴部	0.6	65	
18		E-3	"	深鉢	胴部	0.8	146	50	E-2	"	深鉢	胴部	0.85	58	
19	SK-2	D-2	"	胴部	0.6	125	51	SK-2	D-1	"	"	胴部	0.6	53	
20		C-1	"	深鉢	口縁部	1.2	182	52	E-3	"	"	胴部	0.6	159	
21	P-290	D-2	"	口縁部	0.85	219	53	SK-3	E-1	"	深鉢	胴部	0.8	56	
22		E-2	"	胴部	0.7	157	54		D-2	"	"	胴部	0.9	26	
23	SK-3	DE-1	"	深鉢	口縁部	0.65	73-89-109 111-114	55			"	口縁部	0.7	17	
24	SK-3	E-1	"	口縁部	0.5	115-120	56	SK-3	E-1	"	"	口縁部	0.65	57-1	
25	P-292	D-2	中期後葉	深鉢	口縁部	0.9	221	57	SK-2	D-1	"	"	口縁部	0.5	2
26	SK-3	E-1	"	口縁部	0.7	7	58	SK-3	E-1	"	"	口縁部	0.8	57-2	
27	SK-2	D-1	"	口縁部	0.8	55	59		D-2	"	"	口縁部	0.6	104	
28		D-2	"	口縁部	0.6	155	60		D-2	"	"	胴部	0.6	158	
29		E-2	"	口縁部	0.7	157	61	SK-2	D-1	"	"	胴部	0.4	50	
30		E-2	"	口縁部	0.5	9	62	SK-2	D-1	"	"	胴部	0.4	129	
31		D-2	"	口縁部	0.4	158	63		D-2	"	深鉢	底部	0.7	20	
32		D-2	"	口縁部	0.6	16	64	SK-2	D-1	"	浅鉢	底部	0.55	144	

第3表 繩文土器一覧表

1種：曾利Ⅲ・Ⅳ式の文様的特徴をもつもの。

2種：曾利Ⅲ・Ⅳ式と加曾利EⅢ式の文様的特徴を合わせもつもの。

b類：加曾利EⅢ式の文様的特徴をもつもの。

c類：里木Ⅲ式系統

1種：里木Ⅲ式の文様的特徴をもつもの。

2種：里木Ⅲ式と曾利Ⅲ・Ⅳ式の文様的特徴を合わせもつもの。

d類：咲烟式系統

番号	器種	山土地点 遺跡	地区	法 番		重 量 (g)	石 材	測定 番号	
				長さ	幅 厚さ				
1	石刀		D-2	(1.8)	2.7	0.3	1.8	標識砂岩	41
2	ミラレード	SB-1	E-2	5.7	4.0	0.8	16	シルト岩	266
3	RF		D-3	1.8	2.4	0.5	1.7	出雲石	96
4	圓形石器		B-3	1.3	2.1	0.7	1.4	シルト岩	237
5	UF	P-290	D-2	3.1	3.8	0.6	7.4	チャート	219
6	UF		E-3	2.2	2.0	0.4	1.6	出雲石	8
7	RF		B-2	(1.2)	1.9	0.3	0.6	シルト岩	131
8	UF		C-1	1.2	1.9	0.8	0.9	黒曜石	178
9	UF	P-288	D-3	3.7	2.5	1.1	6.1	シルト岩	217
10	UF		E-3	4.3	7.3	1.5	32	砂岩	264
11	UF		D-3	4.1	5.2	1.1	17	砂岩	172
12	刮片		C-3	1.5	1.9	0.8	1.3	緑色砂岩	105
13	刮片		E-2	1.7	1.1	0.5	0.2	黒曜石	192
14	刮片		D-3	6.1	6.8	1.8	73	砂岩	196
15	打製石斧		C-2	(7.5)	6.4	2.2	120	砂岩	175
16	打製石斧		D-3	11.0	5.9	1.8	139	砂岩	21
17	打製石斧	P-284	D-2	(8.3)	6.4	1.8	67	砂岩	213
18	敲石		C-2	9.1	5.3	3.6	246	砂岩	176
19	敲石		D-2	12.0	8.9	3.2	442	砂岩	171
20	石皿		C-2	(18.0)	(16.9)	6.3	3000	砂岩	134
21	RF		D-4	13.3	7.9	3.4	280	砂岩	263
22	RF		D-3	12.6	6.0	3.9	228	砂岩	94

第4表 石器一覧表

寺遺跡で類例が見られる。県東部地区では若宮遺跡（富士宮市）で早期の押型文段階の出土例が知られる。b類の撫糸文土器やc類の繩文施文の土器は、菊川町の三沢西原遺跡でも出土している。

II 群土器

中期のものをII群としたが、ほとんどが中期後葉に位置付けられる。各地の系譜が混在することが当地域における該期の土器群の特徴である。類は型式に沿って分類した。そして典型的な文様構成をもち地域性や系統が明らかなものを1種とし、複数の系譜の特徴が混在し見受けられるものを2種や3種とした。2種や3種は異系譜の流入と在地化の進行の結果と理解されよう。種別は文様構成、胎土の色調や器壁の厚みなどを基準にした。

a類は曾利III・IV式に比定できる。中部山岳地帯の系譜と言われる。菊川町内では善福寺遺跡や久保之谷遺跡等で出土した。猿田谷遺跡も含め該期の土器群の主体を占める。一方胴部に結節繩文を施すe類は伴出するものの、いずれの遺跡でも客体に過ぎない。伊那地方で顕著に認められ、県下では広野遺跡（豊田町）での出土例が知られる。b類は加曾利E III式に比定できる。善福寺遺跡では曾利III・IV式につぐ出土点数を示したが、本遺跡においては22の1点に過ぎない。関東地方の系譜といわれるが、本遺跡と善福寺遺跡でのあり方の違いに注目したい。c類は里木III式に比定できる。

1種：咲烟式の文様的特徴をもつもの。

2種：咲烟式と曾利III・IV式の文様的特徴を合わせもつもの。

3種：咲烟式と加曾利E III式の文様的特徴を合わせもつもの。

e類：南信州の系統

f類：繩文施文のもの一括

g類：無文のもの一括

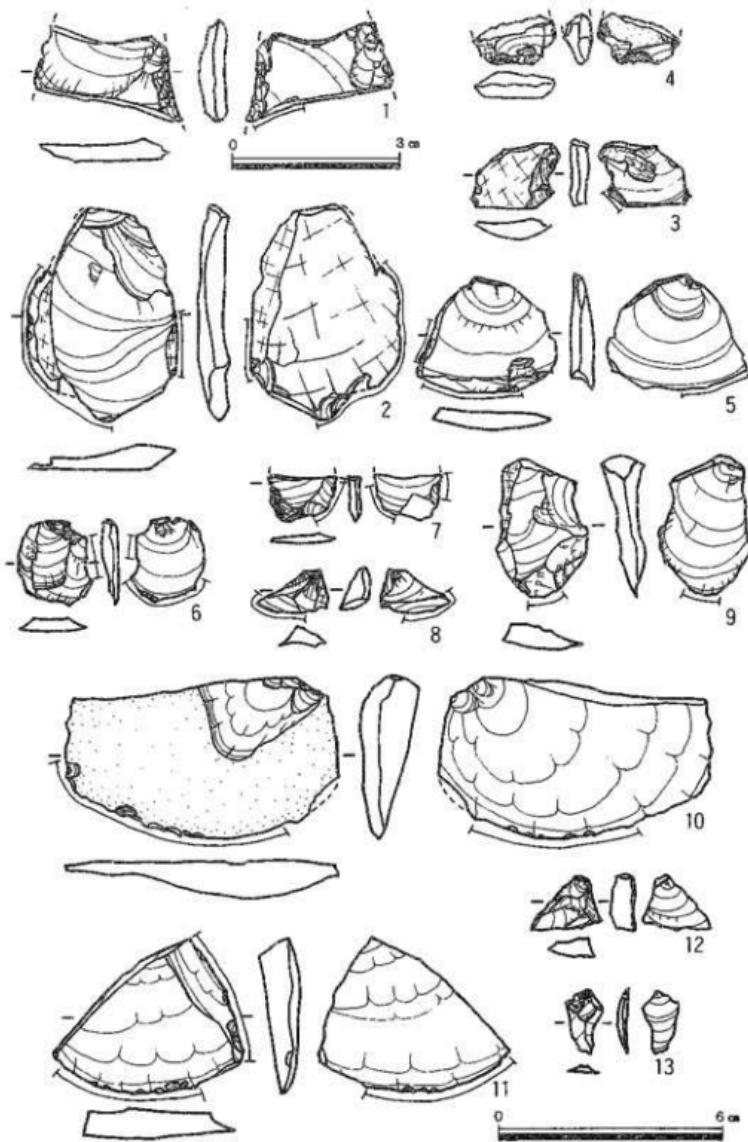
h類：繩文地文に沈線施文のもの一括

i類：沈線と隆帶による文様をもつもの一括

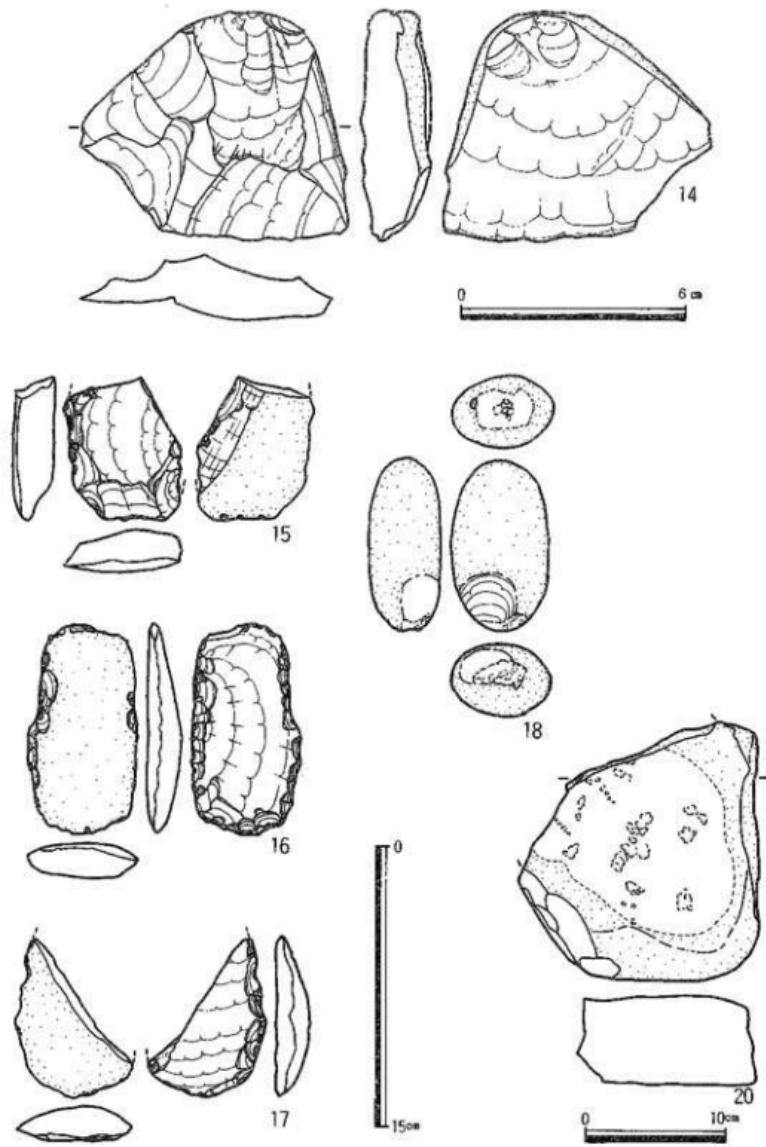
類別外：類別困難な底部

I 群土器

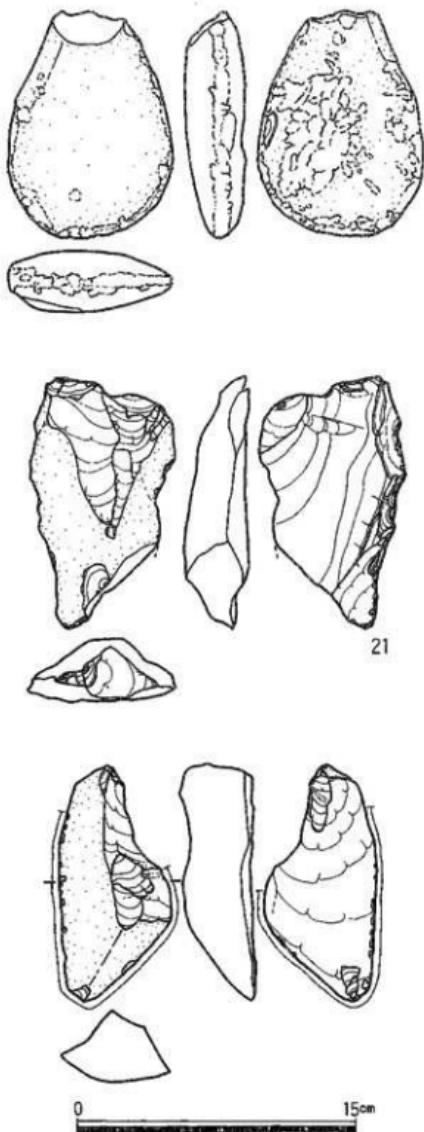
a類の表裏繩文土器は、菊川町善福



第10圖 出土遺物3（石器1）



第11図 出土遺物4（石器2）



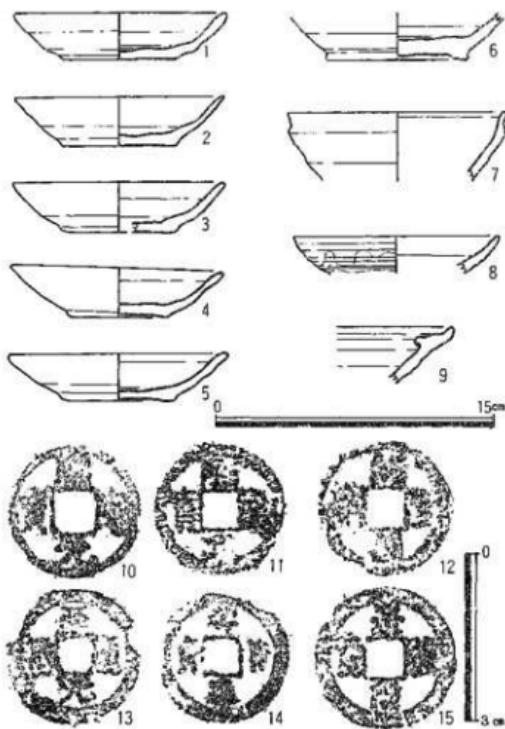
第12図 出土遺物5（石器3）

東鎌塚原遺跡（島田市）や牛岡遺跡（掛川市）でも出土しており、東遠地区への西日本の系譜の波及と理解されよう。d類は啖煙式に比定できる。東海的な要素と言われるものである。

石 器（第10～12図、第4表、写真図版4）

石器組成は石鎌1点、スクレーパー1点、楔形石器1点、加工痕ある剥片4点、使用痕ある剥片6点、剥片3点、打製石斧3点、敲石2点、石皿1点、碎片1点の計24点である。うち4点は遺構に伴出し、その他は遺物包含層から出土した。

石材は砂岩（礫岩、硬質砂岩も含む）がほとんどで、ついでシルト岩、黒耀石の利用が顕著である。その他にチャート、珪質砂岩が見られる。1は基部と先端部が欠損した石鎌である。2は左側縁にスクレーパーエッジが見られる。3の背面は節理面である。4は上半を欠いている。下端に見られる加工痕と潰れの痕跡から楔形石器と思われる。5・6・8～11は使用痕ある剥片である。下端に使用痕が認められる。10は自然面を残す横長剥片を素材にする。12～14は剥片である。14は自然面打面の剥片である。15～17は面のいずれかに自然面を残す打製石斧である。18は石核素材の打製石斧である。18・19は敲石である。18は両端に



第13図 出土遺物 6 (中・近世)

摩滅面とあばた状の敲打痕が見られる。19は扁平な自然礫を用いた敲石である。両側面から下端を巡る範囲と平坦な腹面に敲打痕をもつ。20は石皿である。下面にも敲打痕が見られる。赤化した面をもち、半分程度欠いている。石臼炉への転用を考えられる。21・22は加工痕ある大形の剥片である。背面に礫面を残し下端は尖っている。土掘り具と思われる。

中近世の遺物 (第13図・写真図版7下・8)

かわらけ (1~5) は、後述する銭貨 6 枚と共に SK-1 から出土した。比較的大きなかわらけである。ロクロ成形で器壁は外反するが直線的である。口縁部は外反し口唇部は尖がる。色調は赤い乳白色から明赤褐色で焼成は良好である。法量は口径 11.3~11.6cm、器高は 2.5~2.7cm である。年代は殿ヶ谷遺跡第4次調査の分類によれば、

品号	銘名	初発年	銅重(銅)/(銅) mm	内径(銅)/(銅) mm	銅 厚 mm	重さ g	登錄番号	出土地点			
10	開寧元寶	1068	23.95	23.73	20.46	19.97	1.40~1.54	2.59	62-1	S K - 1	D - 2
11	開元通寶	966	23.95	24.04	19.28	18.99	1.30~1.44	2.26	62-2	"	"
12	元豐通寶	1078	24.40	24.36	19.14	19.02	1.51~1.78	2.47	62-3	"	"
13	聖道元寶	995	24.63	24.52	18.30	18.45	1.31~1.61	2.37	62-4	"	"
14	祥符通寶	1009	(23.78)	23.83	18.93	18.52	1.30~1.73	2.69	62-5	"	"
15	嘉祐元寶	1034	25.52	25.81	18.93	18.52	1.36~1.52	2.60	62-6	"	"

第5表 銭貨一覧表

2群のⅡ類A2にあたり、14世紀代の鎌倉時代ごろのものと思われる。

山茶碗(6)は調査区外西50mの茶畠わきの西斜面で表採された底部片である。色調は灰白色で胎土には径1~1.5mmの白色粒子を微量含む。

施釉陶器7は天目茶碗である。釉薬は鉄釉で口縁部は茶色、体部は紫黒色を呈する。器形は口縁部は外側に短く折り返され、体部は丸みを持ち半球形をなす。8は小皿である。乳白色の灰釉が内面全体と口縁部外面に施されている。器高は低く体部は内弯気味に立ち上がり口縁部を外反させない。9は擂鉢である。口縁部の内側を水平に外反させる。サビ釉で覆われ素地は淡茶色である。8は瀬戸産、7・9は志戸呂焼で18世紀ごろのものと思われる。

銭貨(第5表)10~15は銅製の銭貨である。緑青で付着し6枚一塊の状態で出土した。表面はいずれも著しく磨り減っている。11は南唐銭で最も古い。その他は北宋銭である。

第IV章 まとめ

今回の調査成果をまとめるとつぎのとおりである。

- 造構密度の高い複合遺跡であることが確認された。時代は縄文時代早期・中期と中世からなる。
- 縄文時代の竪穴住居跡3棟と柱穴多数が認められた。この時期には段丘上で集落が営まれていたことがあらためて確認された。
- 中世の土壤から銭貨とかわらけが出土した。このことは、かわらけの年代と横地城周辺の当時の生活空間を考えるうえで貴重な資料を提供したと言えよう。
- 江戸時代の遺物が若干出土したが、造構に伴うものではなかった。
- トレンチ調査の結果、旧石器時代の遺跡は認められなかった。

なお調査と本稿をまとめるにあたり、下記の方々と関係機関から種々の御教示と協

力を戴いた。末尾ながらここに記して御礼申し上げたい。

加藤賢二　近藤孝義　戸塚和美　賛元洋　山崎克巳

分けても大龍山興嶽寺の近藤住職夫妻には、現地調査において多分のご協力を賜った。重ねて御礼申し上げたい。

参考文献

- 菊川町教育委員会 1985 「三沢西原遺跡」菊川町埋蔵文化財報告書第4集
" 1987 「猿田谷遺跡」菊川町埋蔵文化財報告書第11集
" 1994 「普福寺遺跡」菊川町埋蔵文化財報告書第29集
" 1995 「小太郎堀」菊川町埋蔵文化財報告書第34集
" 1996 「殿ヶ谷遺跡第4次」菊川町埋蔵文化財報告書第36集
" 1994 「菊川町史跡・遺跡地図」
島田市教育委員会 1989 「東峰塚原遺跡」島田市埋蔵文化財報告書
袋井市教育委員会 1981 「袋井市大畑遺跡」袋井市埋蔵文化財報告書
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「牛岡遺跡Ⅱ」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第57集
松本一男 1994 「窓穴式住居跡の分析について」「地域と考古学」 向坂鋼二選著記念論集刊行会
向坂鋼二 1988 「第2節 繩文時代の重要な遺物」「静岡県史」資料編3 考古3 静岡県
日本貨幣商協同組合編 1988 「日本貨幣型錄」
永井久美男編 1994 「中世の出土錢」兵庫埋蔵銭調査会

猿田谷遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1996年3月9日発行

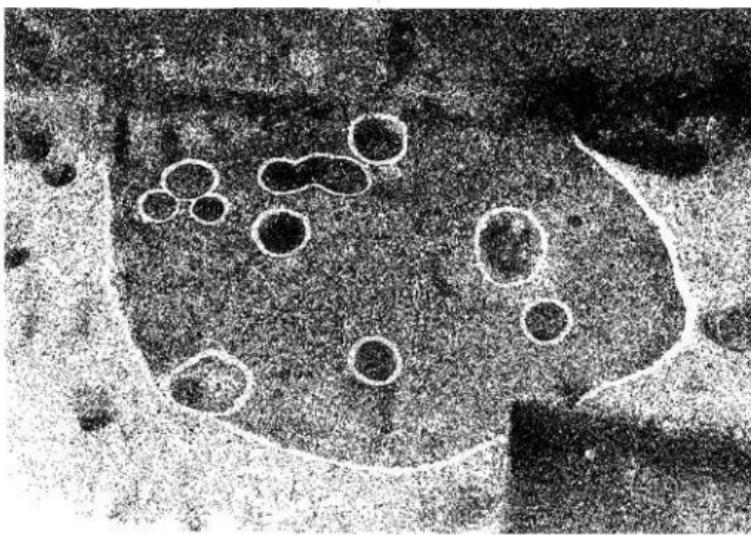
編 集 静岡県菊川町教育委員会
発 行 静岡県菊川町教育委員会
印 刷 株式会社開明堂

写 真 図 版

写真図版 1



C・D・E区完掘（東から）

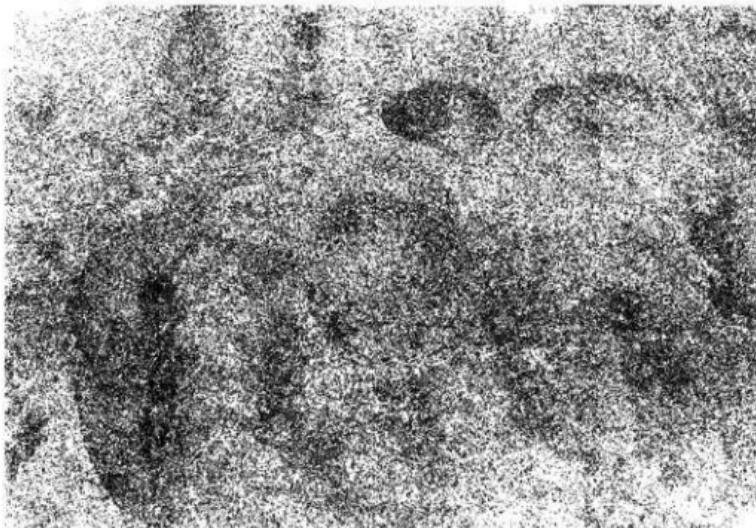


S B - 1 完掘（南から）

写真図版 2

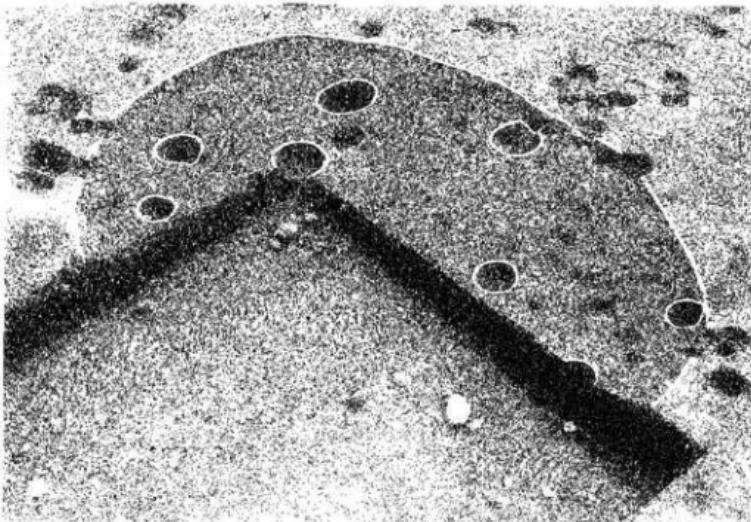


SK-4 集石検出（南から）

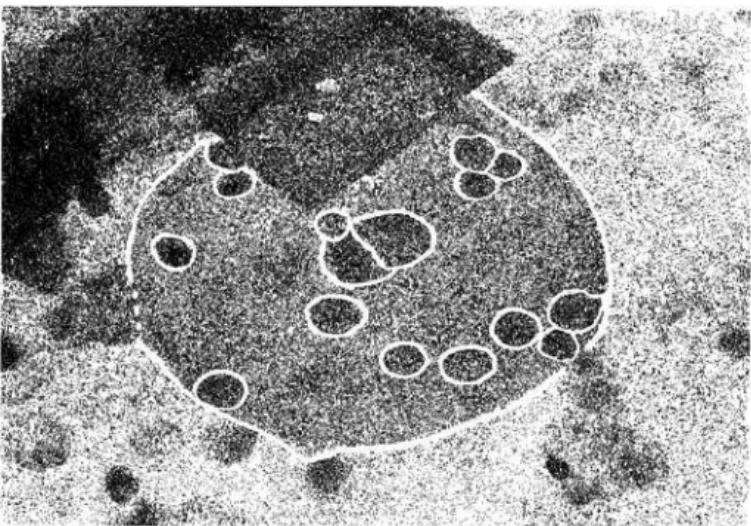


SK-4 完掘（中央：南から）

写真図版 3



SB-2 完掘（北西から）

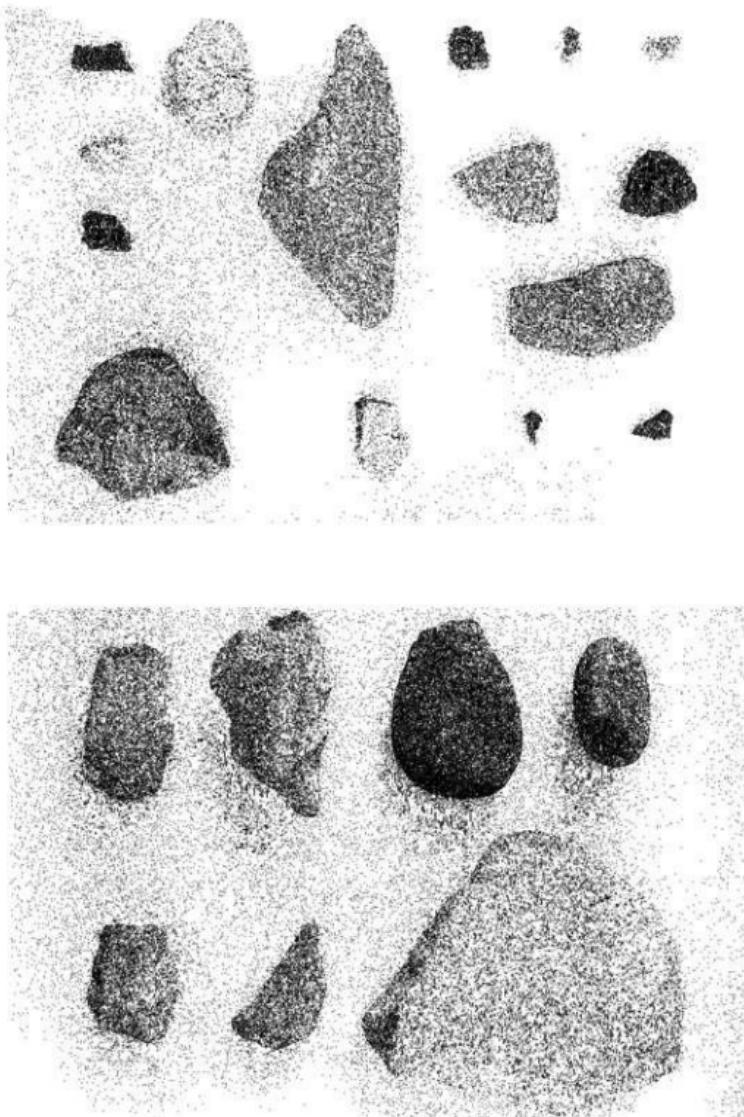


SB-3 完掘（南西から）

1		6	8	7
4	2	22	11	5
3			10	
14		9	13	12

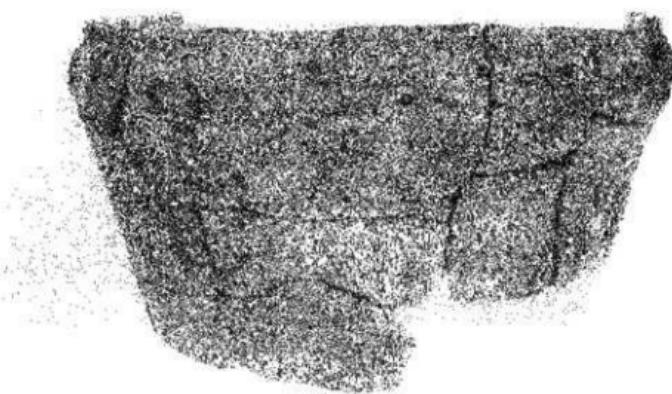
16	21	18	19
15	17		20

写真図版 4

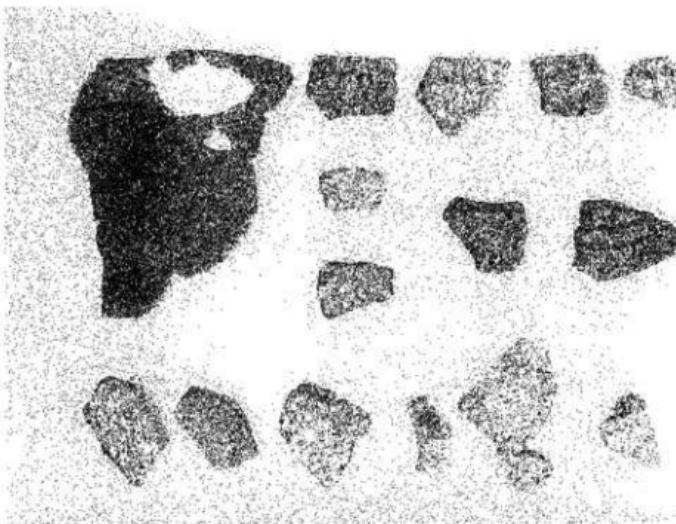


出土遺物

	26	25	27	28
24		29		
	31		36	30
◇	63	◇	8	64
				◇



23

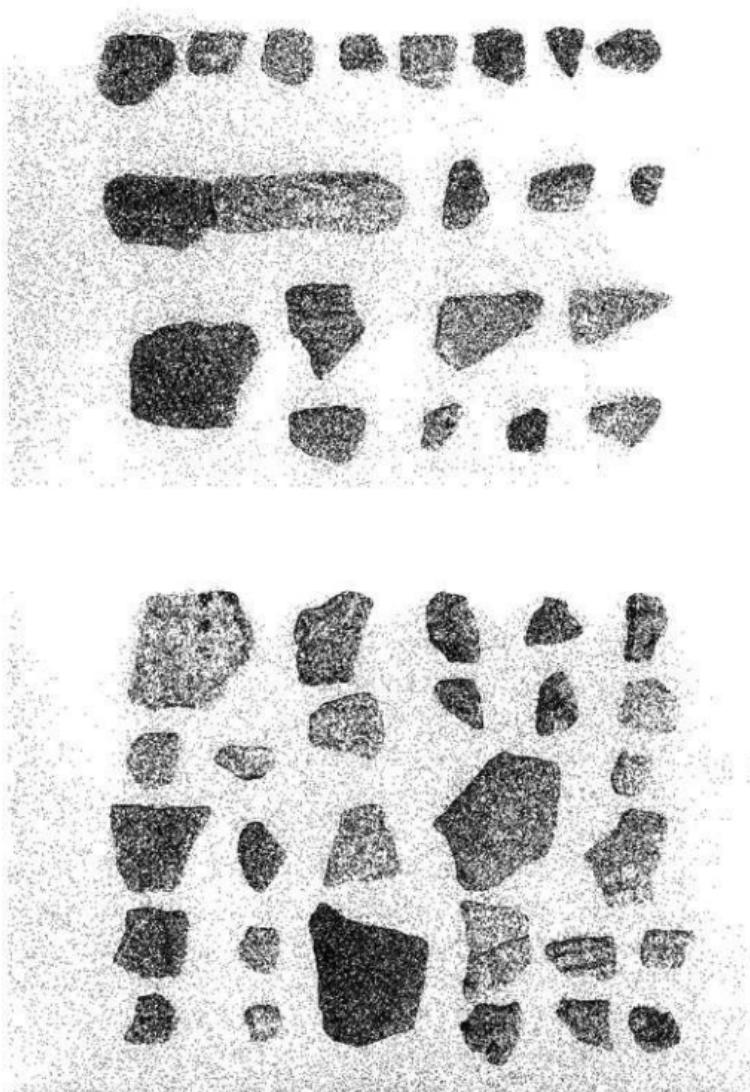


出土遺物

37	42	39	33	48	40	◇	41
14				60	43	◇	
		38		50			62
15							
	19		◇	◇		61	

20	17	55	57	58	
	◇	56	◇	22	
12	◇	◇	52	◇	
45	18			16	
46	47	49	54	32	21
44	◇		51	34	59

写真図版 6

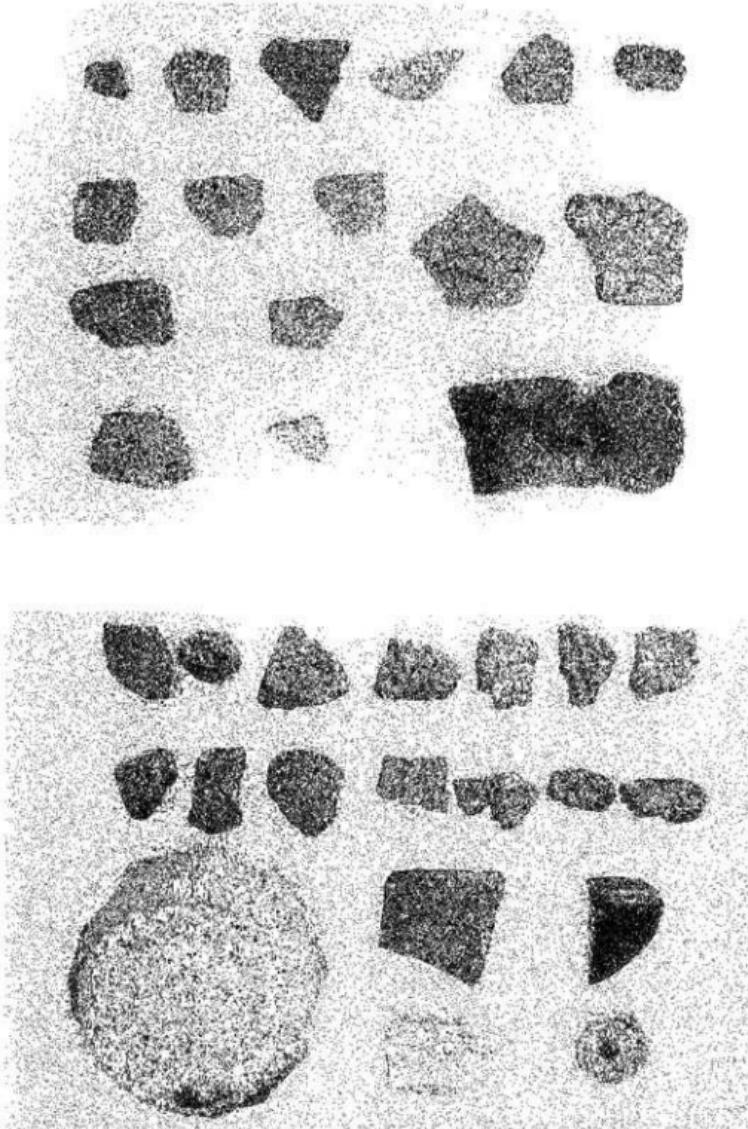


出土遺物

◇	◇	◇	◇	◇	35
◇		◇			
			◇	◇	
◇		◇			
◇	◇				53

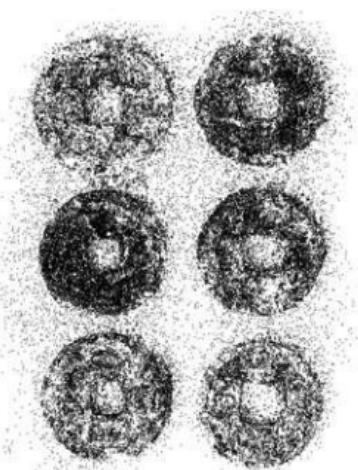
2	1	3	13	4	5	6
9	7	10	11	◇	◇	◇
6				9		7
8	錢貨	10~15				

写真図版 7



出土遺物

写真図版 8



10 13
11 14
12 15



1



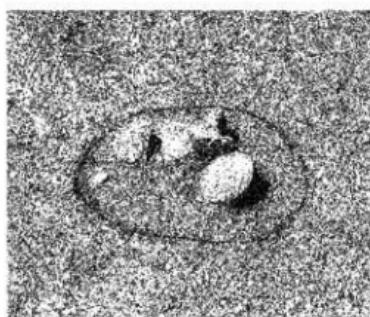
2



3



4



5

SK-1 遺物出土状態（東から）

出土遺物